

文化財構造補強再考

— 保存理念と構造補強の関係を考える —

土地と結びついた不動産の構築物において、耐震は不可避の問題である。

それは歴史的価値を有する構築物においても同様であるばかりか、問題はよりいっそう複雑となる。

なぜなら、文化財としての価値と耐震という近代的な思想・技術が往々にして対立するからである。文化財建造物の保存修理においては、こうした工学的見地をどのように文化財に取り込み、構造補強を行うかが大きな課題となり、さまざまな模索が行われてきた。

この模索の中で、現在にまで続く構造補強の思想および手法の枠組みが構築され始めるのは国宝保存法が制定される前後、昭和初期である。

それを推し進めたのは2人の構造家、坂静雄と棚橋諒であり、彼らによって近代的修理の構造補強方針の枠組みが提示されたと言っても過言ではない。

戦後の構造補強はその枠組みの中で推進されたが、歴史的建造物の裾野が著しく拡大するとともに、保存修理の課題が複雑化し、保存理念そのものも多様化している現在において、この昭和初期の枠組みそのものを再考し、アップデートする必要はないだろうか。

今回のシンポジウムでは、建築史と構造という領域の異なる専門家の対話により、近代的構造補強のこの枠組みについて、現在の補強事例を視野に入れつつ再検証し、歴史的建造物の保存理念と構造補強の関係について考えたい。

会場：

奈良国立博物館 講堂（東新館1階）※対面のみ

日時：

2026/03/08（日）13:00 – 17:00

主旨説明：前川歩（畿央大学）

「坂静雄と棚橋諒が構築した構造補強の枠組み」

□発表：

発表①：青柳憲昌（立命館大学）

「法隆寺昭和大修理および金堂焼損材再構築の保存理念と構造補強」

発表②：西岡聰（文化庁）

「法隆寺以降の文化財建造物構造補強の歴史」

発表③：村田典彦（京都府）

「近年の耐震補強事例－東福寺常楽庵を中心に－」

発表④：腰原幹雄（東京大学）

「昭和期構造補強の原点と現在－坂静雄の提案－」

□討論・コメント：

青柳×西岡×村田×腰原×前川

参加費：無料

申し込み：3月4日（水）までに下記googleフォームからお申込みください。

<https://forms.gle/voxUSguiBzguEkk97>

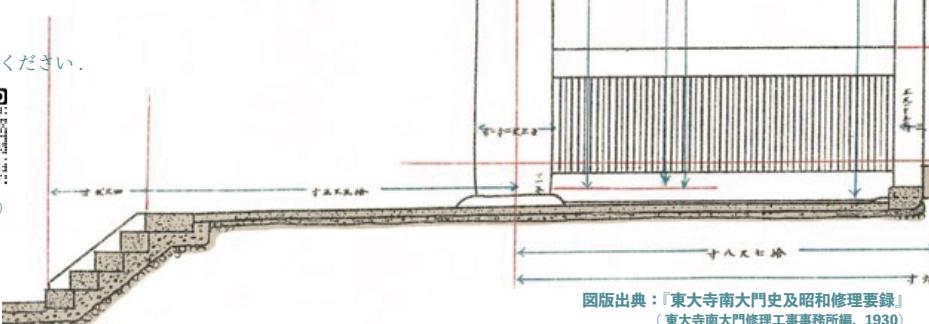


問合せ：前川歩（a.maekawa@kio.ac.jp）

（googleフォームで回答できない場合はこちらに参加のご連絡をお願いします。）

主催：日本建築学会近畿支部建築史部会

後援：日本建築学会建築歴史・意匠委員会日本建築史小委員会



図版出典：『東大寺南大門史及昭和修理要録』
(東大寺南大門修理工事事務所編、1930)